

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月4日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02407

研究課題名(和文) 薄田泣菫文庫の全容解明に向けての総合的研究 明治・大正文壇の思想的水脈として

研究課題名(英文) A Comprehensive Study of Susukida Kyukin 's Collection : as a Philosophical Bedrock for Meiji - Taisho Literature

研究代表者

西山 康一 (Nishiyama, Kouichi)

岡山大学・社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：40448212

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：最初に、薄田泣菫文庫の完全な目録(所蔵リスト)を、倉敷市文化振興課と共に完成させた。その上で、新たに見つけたものも含めて、同文庫に収蔵される書簡・原稿・日記・写真等を検討し、たとえば書簡から泣菫を取り囲む文壇のネットワークのありようを浮かび上がらせたり、また泣菫の詩集『白羊宮』の原稿を分析して特にその句読点の機能の重要性を同時代の詩壇の動きの中で明らかにしたり、さらには薄田泣菫の日記を解読することで当時の新聞社学芸部の仕事内容や文学者・文化人との関係性を明らかにした。そして、本研究の集大成として同文庫の資料を活用して、本科研費メンバー以外の研究者らとともに『薄田泣菫読本』を刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

薄田泣菫文庫の資料を上記のように総合的に検討したことで、薄田泣菫の詩人・エッセイスト・ジャーナリストとしての活躍のみならず、彼をめぐる詩壇・文壇の動き、さらには新聞社学芸部の仕事や文壇とのやり取りの実体を明らかにするなど、文学研究全般さらにはジャーナリズム・文化史の研究にも意義のある成果となった。また、『薄田泣菫読本』では一般にもわかるように泣菫の人生を解説し、なおかつ彼のことを語る様々な文学者や文化人の文章も列挙したことで、泣菫の偉大さや彼をめぐる明治・大正文壇の思想的水脈を、研究者のみならず一般(特に泣菫の出身地の倉敷市民の方々)にも伝えるという社会的意義も有することとなった。

研究成果の概要(英文)：At first, we compiled a complete catalog of Kyukin Susukida's Collection in collaboration with the Culture Promotion Section of Kurashiki City. Then we analyzed the letters, manuscripts, journals, and photographs included in this collection by using this catalog. The letters from friends of Kyukin described the literary network that surrounded him. The manuscript of his collection of poems, Hakyuyokyu, has helped reveal the significance of Kyukin's use of punctuation in comparison to the works of his contemporaries. Further, with the reading of his journals, there emerged a clear picture of the kind of work that was carried out in the literature department of a newspaper company and its relationship with the literary world and intelligentsia of the time. By using materials found in this collection, a Reader of Kyukin Susukida was also published in collaboration with researchers who were not part of this project as a culmination of this study.

研究分野：日本文学

キーワード：薄田泣菫 文庫 倉敷 日本文学 近代詩 メディア研究 日記 原稿

## 1. 研究開始当初の背景

明治時代には詩壇で一世を風靡し、大正期以降はジャーリスト・名随筆家として活躍した薄田泣菫の旧蔵資料(以下、薄田泣菫文庫と呼ぶ)が、彼の故郷である倉敷市に残る。本研究の研究対象であるこの薄田泣菫文庫は、2004年以降、4度にわたって倉敷市が薄田泣菫の遺族より寄贈を受けた資料の総称である。現在は、倉敷市文化振興課において管理保管されている。薄田泣菫文庫に含まれる資料を大別すると、書簡(泣菫自身や彼の身内のものがあるが、主に著名な作家・詩人・文化人から泣菫に送られたもの) 原稿(著名な作家・詩人・文化人のものもあるが、主に泣菫自身のもの) 写真(泣菫自身や身内のもの、さらに著名な作家・詩人・文化人のもの) その他(泣菫の日記・メモなど) という内訳になっている。その膨大な数に加えて、多分野にわたる著名人の資料を含むことから、倉敷市では2009年に薄田泣菫文庫研究プロジェクトを発足させ、目録の整備、書簡の翻刻作業等が進められてきた。だが、その資料の膨大かつ多岐にわたる内容から、全容を解明するためには、研究としてさらに深化させてゆく必要であった。

## 2. 研究の目的

本研究で対象とする薄田泣菫文庫は、その膨大な量、また多様な内容からしても、稀有な資料群である。そこには、泣菫自身の原稿・日記・メモといった肉筆資料のほか、彼が新聞文芸欄の編集に携わっていたことから、著名な作家・詩人・文化人の書簡も多く含まれている。今までの研究活動においては、このうち著名な作家・文化人の書簡を主な研究対象とし、その翻刻・注釈を進めてきたが、さらに新たな書簡も見つかり、書簡だけでも全容解明に至っておらず、さらなる調査が必要であった。また、原稿などに関しては、それが文学作品の生成過程や思想の成立経緯が知られる貴重な資料であるにもかかわらず、ほとんど研究されてこなかった。さらに、日記や写真についても、上記した泣菫の仕事内容から、泣菫個人のみならず当時の文壇・メディア・文化史全体を照らし出す重要な資料なのだが、ほとんど手の付けられていない状況だった。これらの調査・解析を通じて、明治・大正期の 知 の交流・影響関係 = 思想的脈を探るのが本研究の目的とされた。

## 3. 研究の方法

本研究は、本研究グループメンバーも参加してきた、薄田泣菫文庫研究プロジェクトによる活動の延長線上に位置づけられる。そこで、これまで 同文庫の目録作成のためのデータ収集・整備、同文庫の書簡資料を中心とした翻刻・注釈、そうした研究成果の公開、といったことを行ってきたが、本研究ではこれらを継承しつつも、(1)新たに確認された資料も含む目録のための再調査・完全な目録の作成、(2)今まで取り上げてきた以外の新出書簡・原稿・日記・メモ・写真などの翻刻・注釈、さらにそれに基づく研究的分析・検討、(3)それらの研究成果の公開を目指す といった形で研究していった。倉敷市・薄田泣菫顕彰会・岡山県内の諸研究拠点など、上記プロジェクトに加わる諸グループとの連携を密にし、今まで以上に、より本格的な研究成果を学界・地域両方に向けて提示・展開していくことを目指した。

## 4. 研究成果

(1) 倉敷市文化振興課と共に薄田泣菫文庫の目録(所蔵リスト)の改訂版を新たに作成。同課にて所有・管理されることとなる。

(2) 同文庫に所蔵されるいくつかの書簡から、平尾不孤と薄田泣菫の交流の実態を明らかにし、さらに平尾不孤の醜聞事件にかかわる他の作家たちの書簡(同文庫所蔵)を利用して、彼らを取り囲む文壇のネットワークのありようを浮かび上がらせた。また、同じく同文庫のいくつかの書簡を利用することで、『大阪毎日新聞』の「日曜倶楽部」に掲載された「最初の印象」や「無駄話」という無署名の記事が、泣菫の書いたものであることを指摘する。特に「無駄話」は、後にコラムニストとしての泣菫の名声を高めた「茶話」の原点にもなるものであったことを明らかにする。

(3) 同文庫に所蔵される薄田泣菫の詩集『白羊宮』の原稿を、そこに含まれる各詩篇の初出掲載誌の形や、それが単行本になった時点での形と比較・検討する。その結果、特に句読点の打ち方に、各詩篇により変動があるとはいえ、きわめて戦略的な利用法が存在することを明らかにする。特に、代表作「ああ大和にしあらましかば」では読点の利用により、その開始と終末において音数の反転構造を作りつつも、開始は加速的に、週末は減速的に読めるようになっており、読点が重要な役割を果たしていることがわかる。反面、重要であるからこそ句読点の

位置は、書き換えの各段階で揺れ続けるものとしてあったことも指摘する。

(4) 同文庫に所蔵される薄田泣菫の日記(断片)を調査。それぞれの断片部分の内容を確認する。特に、大阪毎日新聞社学芸部副部長として泣菫の活躍ぶりが窺え、史料価値の高いものであることから、大正7年1月の日記断片を翻刻・分析する。その結果、東京に出張して多くの文壇流行作家に直接会って原稿依頼や掲載の打ち合わせをしたり、芝居を見に行き行ってその観劇記を新聞に掲載したりするなどといった、当時の新聞社の学芸部の仕事内容が明らかになった。さらに、芥川龍之介が泣菫と会って大阪毎日新聞社の社友になる打ち合わせに関して、これまで不明だったその日時が明らかになるなど、個別具体的な事実が浮かび上がることもあった。

(5) これまでの薄田泣菫文庫に関する研究の集大成として、倉敷市文化振興課や本科研費メンバー以外の大学研究者らとともに、『薄田泣菫読本』という著作物を刊行した。そこでは、同文庫所蔵の写真や書簡・原稿などを多く利用し、薄田泣菫の人生を浮かび上がらせるとともに、泣菫と同世代あるいは次の世代の作家・詩人・文化人たちと泣菫の交流をも明らかにする。特に、本研究課題名にもある「明治・大正文壇との思想的水脈」に関わることでは、泣菫について、他の作家・詩人・文化人が語っている文章(書簡は除く)を集めて列挙することで、泣菫が同世代(明治世代)のどのような人物と思想を共有し、またどのような人物とそれを共有できなかったか、さらに次の世代(大正世代)のどのような人物との間に、その思想的水脈を見て取ることが出来るか、といったことが浮かび上がるように編集した。その他、泣菫の詩や随筆作品が鑑賞できるように彼の代表的な作品も掲載し、特に難解といわれる詩作品には注や解説等を加えるなどして、一般読者にも手に取ってもらえるように心がけて編集した。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計 4 件)

西山康一・荒井真理亜、「倉敷市蔵薄田泣菫文庫 薄田泣菫日記(大正七年一月)翻刻・解説」、『岡大文論稿』、査読有、第47巻、2019年、pp.16-35

竹本寛秋、「薄田泣菫『白羊宮』における句読点の戦略」、『西日本国語国文学』、査読有、第5巻、2018年、pp.1-15

掛野剛史、「茶話」以前の泣菫コラム」、『日本古書通信』、査読無、第82巻9号、2017年、pp.8-9

掛野剛史、「文壇醜聞と友情 薄田泣菫と平尾不孤」、『文学』(岩波書店)、査読無、第17巻第3号、2016年、pp.38-48

### 〔学会発表〕(計 2 件)

竹本寛秋、「薄田泣菫『白羊宮』論 倉敷市蔵原稿の検討から」、『西日本国語国文学会(第六十七回、福岡大会) 2017年

竹本寛秋、「薄田泣菫文庫『白羊宮』原稿をめぐって」、『シンポジウム「薄田泣菫宛書簡集全3巻」の刊行を終えて』(於倉敷市立美術館、招待講演) 2017年

### 〔図書〕(計 1 件)

倉敷市・薄田泣菫文庫調査研究プロジェクトチーム(片山宏行、西山康一、竹本寛秋、掛野剛史、庄司達也、荒井真理亜、加藤美奈子)編著、翰林書房、『薄田泣菫読本』、2019年、総ページ数160頁

### 〔その他〕ホームページ(計 2 件)

八木書店グループ ホームページ(西山康一、「薄田泣菫と近代画家 満谷国四郎・鹿子木孟郎・鍋木清方」) <https://company.books-yagi.co.jp/archives/1447>

八木書店グループ ホームページ(西山康一、「近代の書簡翻刻の苦心と喜び」) <https://company.books-yagi.co.jp/archives/1335>

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：片山 宏行

ローマ字氏名：KATAYAMA Hiroyuki

所属研究機関名：青山学院大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：**60233756**

研究分担者氏名：竹本 寛秋

ローマ字氏名：**TAKEMOTO Hiroaki**

所属研究機関名：鹿児島県立短期大学

部局名：その他部局等（人文学科）

職名：准教授

研究者番号（8桁）：**20552144**

研究分担者氏名：掛野 剛史

ローマ字氏名：**KAKENO Takeshi**

所属研究機関名：埼玉学園大学

部局名：人間学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：**00453465**

## (2)研究協力者

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。